

## 「持ち物を共有する」

2016年03月14日

**使徒言行録4章32節～37節。**信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものと言う者はなく、すべてを共有していた。使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、皆、人々から非常に好意を持たれていた。信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。たとえば、レビ族の人で、使徒たちからバルナバ——「慰めの子」という意味——と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、持っていた畑を売り、その代金を持って来て使徒たちの足もとに置いた。

聖霊降臨によって、ナザレのイエスをメシア（キリスト）と信じた人々は言葉が通じ、心をついにした。使徒たちは大いなる力をもって主イエスの復活を証した。「大いなる力をもって」とは奇跡を行う力であろう。復活の主イエスが使徒たちに力を与え、不思議なしるしを行なわせた。また、復活の証しは、主イエスがガリラヤで現した愛と真実を生き生きと甦らせた。主イエスは私たちの間に生きておられるという喜びの信仰は互いの愛を確かなものにした。主イエスの十字架と復活によって、罪を赦され、救われた者として、生と死を分かち合う群れを形成したのである。愛と真実の息づく群れは人々から好意を持って受け止められ、仲間に加わる人が増していった。

群れに加わった信者たちは自分の持ち物を私物化せず、共有のものとした。だから、食べるに事欠く貧しさはなく、全てが満たされた。土地や家を持っている人は皆、それらを売り払い、代金を使徒たちの足もとに置いた。その代金は、必要に応じて各々に分配され、不足することはなかった。一人の例が報告されている。レビ族出身で、使徒たちからバルナバ（「慰めの子」という意味）と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフは自分の畑を売り、代金を持って来て使徒たちの足もとに置いた。バルナバは初代教会において重要な働きをしている。殊に、パウロをアンティオキア教会に招き入れ、パウロが伝道者になる道備えをしたことは教会史にとって決定的な意味を持ったと言える。

聖霊によって誕生したエルサレム教会は原始共有制の群れであった。持ち物を持ち寄った共有制であって、群れに共産制はなかった。このエルサレム教会を理想の集団と考えた人々は多くいる。ロシアの文豪トルストイは人道主義、平和主義、他者への奉仕に基づくユートピア集団の形成を望んだ。トルストイの影響を受けた武者小路実篤は「美しい村」を作ろうとした。イスラエルの「キブツ」、ブラジルの「弓場農場」、「ヤマギシの村」なども、同じような理想を追い求めた。しかし、その理想は実現したとは言えないだろう。ソ連は人類の希望とした共産主義を目指したが、権力機構が官僚化し、自由を抑え込み、崩壊していった。人々は自由を求めて生き、全き共有・共産制社会を実現することはできなかった。人間の社会は自由が保障されないと行き詰るということである。

エルサレム教会において、共有制を可能にした理由は終末信仰であろう。主イエスはすぐに再臨され、歴史に終わりがもたらされる。すぐに、終わりが来るのであれば、私有財産に固執する意味が無くなる。ところが、終末の遅延が問題になって、エルサレム教会に偽りと混乱が生じるようになっていった。原始共有制は崩れたが、初代教会は主イエスの愛に倣う分かち合いが互いを支える力となっていった。